Block 6　後期　テュートリアル課題 5

「もっと生きたい」

無断で複写・複製・転載すると著作権侵害となることがありますのでご注意下さい。

東京女子医科大学
10. 31 '97.
学事部

東京女子医科大学B6-T2-5　1997年11月
東京女子医科大学精神医学教室　古城慶子

シート1

1997-B6-T2-5

「もっと生きたい」

上野春子さんは43歳の既婚の女性です。41歳の夫との間に、13歳の中学生の息子がいます。1年前に、下腹部の膨満感と時折ある下腹部痛を主訴に婦人科を受診し、卵巣癌と診断され、すぐに入院を勧められて手術を受けました。当初、春子さん自身は、早期癌と説明されていました。退院後、1カ月毎に入院し、7日間の抗癌剤による全身化学療法を受けていましたが、術後1年目に、腹部全体の疼痛と膨満とが目立ち始めました。腹水貯留と説明されて、2回目の大きな入院となりました。入院後2カ月の間に、卵巣癌が腹腔内全体に広がって腸閉塞をも起こすようになりました。3カ月目には肝、脾臓への癌転移、さらには胸水の貯留が認められました。強い腹痛と治療効果があがらないことから、「早く死なせてほしい」と訴えるようになりました。

シート2

1997-B6-T2-5

「もっと生きたい」

ペインクリニックにコンサルトする一方で、気分のむらや落ち込みが著明になってきたので、精神科にもコンサルトしました。主治医、看護婦、ペインクリニックの医師、精神科医、および家族の連携と協力を得て、精神状態は次第に安定してきました。一方、夫は今回の入院当初から、予後半年という説明を受けていましたが、春子さんと息子にそのことを告げるべきかどうかで悩んでいると主治医に打ち明けました。

[資料1]：ターミナル期の症状、緩和医療、QOL評価法に関係する資料

シート3　　1997-B6-T2-5

「もっと生きたい」

入院4カ月目に入ったころ、春子さんは定期的な腹水除去、高カロリー輸液を施行し、少量の経口摂取が可能な状態でした。痛みはペインクリニックによって、よく抑えられていました。しかし、退院したいと夫や主治医に言い出しました。「息子の運動会を見に行きたい」からだというのです。今回の再入院のときから、「癌の再発ではないか」と察していたともいいます。ここで主治医は、夫も同席のうえ、春子さんに「その推測は残念ながら当たっています。辛いことですが、残りの月日がそれほど長くはありません。できるだけのことはしますが、治すことは不可能です。今から心の準備をしてください」と説明し、春子さんの希望を改めて確認しました。「希望がかなえられるように、ソーシャルワーカーの助言を求めながら、療養の場をどこに置くのが良いか、一緒に考えて行きましょう」と主治医は支持の姿勢を示しました。

シート4　　1997-B6-T2-5

「もっと生きたい」

抗癌剤治療を中止し、高カロリー輸液による栄養補給を行ないながら、息子の運動会への参加を目標に自宅での療養に切り替える方針を話し合いました。そこで、春子さんを支える地域ネットワークづくりが必要となりました。夫、医師、看護婦、ソーシャルワーカー、訪問看護婦、ボランティア、ヘルパーがチームを組んで、在宅ケアにあたることになり、入院4カ月後半に退院しました。病院での春子さんは、会話も困難なほど、衰弱している日もありましたが、自宅では運動会当日までの3週間、夫の晩酌に付き合ったり、家族と冗談まじりの会話もできたそうです。息子の運動会には、夫と訪問看護婦の協力を得て、参加することができましたが、次第に全身状態が悪化し、2週間後に亡くなりました。

[資料2]：ターミナル期の経過と観察の表（空欄部分のA、B、C、Dを補充させる。解答はテューターガイドの16頁を参照。）

[資料3]：実際にターミナルケアに携わった医師が綴る感想文